

汪曾祺語録

作者 汪 曾祺
翻訳 閻 秋君

人間草木

①凡花大都是五瓣，梔子花却是六瓣。山歌云：“梔子花开六瓣头。”梔子花粗粗大大，色白，近蒂处微绿，极香，香气简直有点叫人受不了，我的家乡人说是：“碰鼻子香”。梔子花粗粗大大，又香得掸都掸不开，于是为文雅人不取，以为品格不高。梔子花说：“去你妈的，我就是要这样香，香得痛痛快快，你们他妈的管得着吗！”



(「六枚の花びら」、早安植物園により提供)

殆どの花は五枚の花びらですが、クチナシの花は六枚です。民謡では、「クチナシの花には六枚の花びら」と歌っています。クチナシの花は厚くて大きく、色は白く、花萼の近くは薄い緑です。香りは強くて、耐えられないほどです。私の故郷では、それを「鼻を打つ香り」と言います。クチナシの花は厚くて大きく、匂いも離れないので、上品な文人たちはそれを品格のない花とみなして受け入れません。クチナシの花はこう言いました。「勝手にしやがれ！私はこの香りがいいのです。思う存分香りたいのです。あなたたちほっといてくれ！」

(「夏天」、執筆：1994年)



②有人说葡萄不开花，哪能呢！只是葡萄花很小，颜色淡黄微绿，不钻进葡萄架是看不出的。而且它开花期很短。很快，就结出了绿豆大的葡萄粒。

ブドウには花が咲かないという人がいますが、どうしてそう言えるのでしょうか。ただ、ブドウの花はとても小さく、薄い萌黄で、ブドウ棚に入り込んで見ないと分かりません。そして、ブドウの花が咲いている期間はとても短いのです。開花して程なくすると、绿豆ほどのブドウが実ります。

(「ブドウ棚の来客」、遠野にて、2019.8)

以下、特に断り書きのない限り、写真は訳者が撮影したものである。

(「葡萄月令」、執筆：1981年)

③他们捡枸杞子其实只是玩！一边走着，一边捡枸杞子，这比单纯的散步要有意思。这是两个童心未泯的老人，两个老孩子！

彼らがクコの実を拾うのは、実は遊んでいるだけなのです。歩きながらクコの実を拾うことは、普通の散歩よりももっと面白いのです。子供の心を持ち続けている二人のお年寄り、本当に年を取った二人の子供なのです。

（「人間草木枸杞」、執筆：1990年）



（「二人」、広島鞆の浦にて、2020.9）

④她又去转了转罗汉堂，爬到千佛楼上看了看。真有一千个小佛！她还跟着一些人去看了看藏经楼。藏经楼没有什么看头，都是经书！妈吔！逛了这么一圈，腿都酸了。小英子想起还要给家里打油，替姐姐配丝线，给娘买鞋面布，给自己买两个坠围裙飘带的银蝴蝶，给爹买旱烟，就出庙了。

彼女は羅漢堂もぶらついて、千仏楼に登って見て回りました。本当に千もの小さな仏像があるのです！彼女は他の人たちについて藏経楼も見学しました。藏経楼にはあまり見どころがなく、経本ばかりでした。あ～あ！ぶらぶらと一回りしてきたら、足が疲れてしまいました。家には油を買って、姉には刺繍用の絹糸を用意し、母には布靴用の布を買い、自分には前掛けの帯に垂れる銀の蝶々を買って、父には刻みタバコを買わなくてはと思出し、小英は寺を出ました。

（「受戒」、執筆：1980年）

生活五味

①一个文艺工作者、一个作家、一个演员的口味最好杂一点，从北京的豆汁到广东的龙虱都尝尝（有些吃的我也招架不了，比如贵州的鱼腥草）；耳音要好一些，能多听懂几种方言，四川话、苏州话、扬州话（有些话我也一句不懂，比如温州话）。否则，是个损失。口味单调一点，耳音差一点，也还不要紧，最要紧的是对生活的兴趣要广一点。



(「豚足の醤油煮」、台北にて、2019.11)

北京の豆汁(水に浸して柔らかくした緑豆をすり潰して作る飲み物)から広東の龍虱(ゲンゴロウ)まで、文化人、作家、俳優は味覚が多様な方が良いでしょう。(貴州のドクダミなど、私もいくつかは食べられません)音感が優れていれば、方言がいくつか分かります。四川方言、蘇州方言、揚州方言(温州方言など、私が聞いても分かりません)。そうでなければ、損をしてしまいます。味覚の幅が狭くても、音感が少し劣っていても、それらはまだいいのですが、一番大切なのは、生活への興味の幅が広いことなのです。

(「口味・耳音・興趣」、執筆：1986年)

②总之，一个人的口味要宽一点、杂一点，“南甜北咸东辣西酸”，都去尝尝，对食物如此，对文化也应该这样。

要するに、幅広く多くの味を楽しむべきです。「南の甘さ、北のしょっぱさ、東の辛さ、西の酸っぱさ」などはいろいろと味わってみた方がいいのです。食べ物に関してはこうなのですが、文化に対してもこうあるべきなのです。

(「口味」、執筆：1986年)



(「麻辣小龙虾」、仙台にて、2019.10)

③蒙古人非常好客，有人骑马在草原上漫游，什么也不带，只背了一条羊腿。日落黄昏，看见一个蒙古包，下马投宿。主人把他的羊腿解下来，随即杀羊。吃饱了，喝足了，和主人一家同宿在蒙古包里，酣然一觉。第二天主人送客人上路，给他换上一条新的羊腿背上。这人在草原上走了一大圈，回家的时候还是背了一条羊腿，不过已经不知道换了多少次了。

モンゴル族はとても客好きです。馬に乗って草原を逸遊している者がいました。彼は何も持っていませんでした、一本の羊の足のほかは。夕暮れ時に、ゲルが見えたので、彼は馬を下りてそこに泊まろうとしました。その主人は、彼が持ってきた羊の足を下ろしてから、すぐ自分の羊を殺して彼を歓迎しました。彼は十分に食べて、十分に飲んでから、その主人のゲルでぐっすり休みました。翌日、彼を見送る時、主人は新しい羊の足を持たせました。彼が草原を一回りして、家に着いた時にも、まだ一本の羊の足を背負っていました。その羊の足が何回入れ替わったのかは、もう分かりません。

(「手把肉」執筆：1993年)

④家常酒菜，一要有点新意，二要省钱，三要省事。偶有客来，酒渴思饮。主人卷袖下厨，一面切葱姜，调作料，一面仍可陪客人聊天，显得从容不迫，若无其事，方有意思。如果主人手忙脚乱，客人坐立不安，这酒还喝个什么劲！



(「家常酒菜」、仙台にて、2021.12)

家庭料理は、主に新しいアイデア、節約、便利の三点が必要です。たまに来客があり、酒を欲しがります。主人は腕を振るって料理をします。ネギと生姜を切って調味料を作りながら、来客とおしゃべりもします。落ち着いてゆったりすることこそが面白いのです。もし、主人が忙しそうにしている、来客が落ち着いていられないとしたら、この酒は何のために飲んでいるのだろうか。

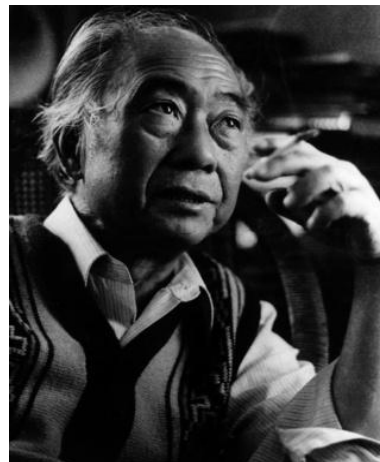
(「家常酒菜」、執筆1987年)

文章真情

①一篇散文最重要的是什么呢？我只是觉得写什么都要有真情实感。不要写自己没有感受过的景色、自己没有体验过的感情。最怕文胜于情，有广告式的感伤主义的调子。散文要控制。要美，但要实在。写散文要如写家书，不可做作，不可存心使人感动。

散文（エッセイ）において最も重要なのは何でしょうか。何を書くにしても偽らざる気持ちが大切だと思います。今までに見たことのない景色や、今まで経験したことのない感情は書かない方がいいのです。私が最も苦手とするのは、文章が感情に勝り、広告のようになってしまっている感傷主義的な調子のもので、エッセイには調子のコントロールが必要なのです。美しく書くと同時に、うそ偽りのないことを心がけましょう。エッセイを書くということは、家族への手紙を書くようなものであり、わざとらしくなく、意図的に読者を感動させない方がいいのです。

（『蒲橋集』、執筆：1981年以降、詳細不明）



（汪曾祺写真、汪朝により提供）



（「生活・直耕」、遠野にて、2019.8）

②我要对“小说”这个概念进行一次冲决：小说是谈生活，不是编故事；小说要真诚，不要花招。小说当然要讲技巧，但是：修辞立其诚。

「小説」という概念に対して、私はある決断しようと思います。小説は生活を語るものであって、フィクションの物語を作るものではありません。小説は誠実さが必要で、ごまかすようなことをしてはいけません。もちろん、小説には技術が欠かせないものですが、その技術は誠実のもとにあるべきなのです。

（「橋辺小説 後記」、執筆：1985年）

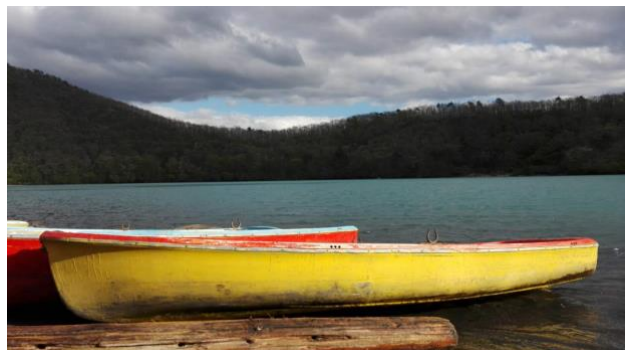
③我希望年轻人多积累一点生活知识。古人说诗的作用：可以观、可以群、可以怨，还可以多识于草木虫鱼之名。这最后一点似乎和前面几点不能相提并论，其实这是很重要的。草木虫鱼，多是与人的生活密切相关。对于草木虫鱼有兴趣，说明对人也有广泛的兴趣。

私は若者に、生活における知識をたくさん蓄積してほしいのです。古代人は詩の役割について、物事を見る目を養うことができ、人と交わる心を培うことができ、怨ごとを表現する方法を知ることができ、そして、草木虫魚の名前を多く知ることができるのだと言いました。この最後の部分は、前の部分と一緒に論じることができないように見えますが、実際には非常に重要なことなのです。草木や虫魚は、人間の生活と密接な関係を多く持っています。草木や虫魚に興味があるのなら、人間に幅広い興味を持っているということでもあるのです。



(「楽在其中」、山東にて、2022.5)

(「葵・薤」、執筆：1984年)



(「人間の美意識」、鳴子にて、2016.5)

④我是个写小说的人，对于人，我只能想了解、欣赏，并对他进行描绘，我不想对任何人作出论断。像我的一位老师一样，对于这个世界，我所倾心的是现象。我不善于作抽象的思维。我对人，更多地注意的是他的审美意义。

私は小説を書く者です。私は人間を理解し、評価し、描写したいだけなのです。私は誰に対しても判断を下したくはありません。私の先生の一人と同じように、この世界に対して、私が心を惹かれるのは現象です。私は抽象的な思考が得意ではありません。人間に対して、私が最も関心を持っているのは、彼らの美意識です。

(「小説三篇・壳蚯蚓的人」、執筆：1983年)

人生邂逅

①我刚到昆明的头二年，一九三九、一九四〇年，三天两头有警报。有时每天都有，甚至一天有两次。昆明那时几乎说不上有空防力量，日本飞机想什么时候来就来。（…）跑警报是谈恋爱的机会。联大同学跑警报时，成双作对的很多。空袭警报一响，男的就在新校舍的路边等着，有时还提着一袋点心吃食，宝珠梨、花生米……他等的女同学来了，“嗨！”于是欣然并肩走出新校舍的后门。跑警报说不上是同生死，共患难，但隐隐约约有那么一点危险感，和看电影、遛溜翠湖时不同。这一点危险感使两方的关系更加亲近了。



（「翹首」、仙台城二の丸広場展望台にて、2020.7）

私が昆明に来て最初の二年間、一九三九、四〇年は、頻繁に空襲警報が鳴りました。時には毎日、さらに一日に二回鳴ることもありました。当時の昆明は攻撃を防ぐ手立てがなかったとも言えます。日本の軍用機はいつでも来ることができたのです。〔…〕空襲警報時の避難は、恋を語るチャンスでした。西南聯合大学の学生が避難する時には、カップルの姿が多かったのです。空襲警報が鳴ると、男子学生は新校舍の道端で待っていて、時には、梨や落花生などのお菓子の袋を持っ

てきて、その学生のお目当ての女子学生が来ると、「やあ」と声をかけるのでした。そして、彼らは肩を並べて校舎の裏口を出て行きました。警報時の避難は、生死を共にし、苦難を分かち合うとまでは言えませんが、ぼんやりとした危機感があったのです。映画を見たり翠湖をぶらついたりとする時とは違うものでした。このぼんやりとした危機感は、二人の関係をより親密にさせたのでした。

（「跑警報」、執筆：1984年）

②活在世上，你好像随时都在期待着，期待着有什么可以看一看的事。有时你疲疲困困，你的心休息，你的生命匍伏着像一条假寐的狗，而一到有什么事情来了，你醒豁过来，白日里闪来了清晨。



この世に生きてると、何か目に見えることをいつも期待しているようです。時には、疲れて眠

（「昼間に訪れる光」、盛岡にて、2019.11）

くて、あなたの心は休んでしまいます。あなたの生命は、うたた寝する犬のように伏しています。しかし何かが起こると、あなたは、昼間に突然朝が来たかのように、すぐに目覚めるのです。

(「邂逅」、執筆：1949年)



(「躍動の楽譜」、仙台澱橋にて、2019.3)

③说不出什么道理，天就是这样，老是这样，什么东西都没有，就是一片蓝。可是天上似乎隐隐地有一股什么磁力吸着你的眼睛。你的眼睛觉得很舒服，很受用，你愿意一直对着它看下去，看下去。真好看，真美，美得叫你的心感动起来。小吕看着看着，心里总像要想起一点什么很远很远的，叫人快乐的事情。

どうということなのかは上手く言えないのですが、空とはつまり、このような感じで、いつもこのようなのです。何もなく、ただ青いのです。しかし、空には何か仄かな磁力があるかのように、あなたの目を引き付けます。あなたの目はとても心地よく、楽しんでいます。あなたはずっと空を見ていたいと思うのです。とてもきれいで、あなたの心が感動するほどの美しさなのです。小呂はそれを見ていると、心の中で遠く離れている何かを、楽しみと呼ばれている何かを思い出したいといつも思うのです。

(「看水」、執筆：1962年)

(仙台高等専門学校)